

特集 『働く』を考える

遊牧民の世界で「働く」

ということ

社会科 鳥越 泰彦

今回のブックフェアのテーマである「働く」というタイトルを目にすると、どんなイメージが湧いてくるだろうか。私の独りよがりかもしれないが、私はあまりいいイメージが湧いてこない。「働く」ことは、確かに人の生き甲斐につながるし、収入が得られることにつながる。収入が多いたることも多いだろう。しかし収入を多くしようとして、払っている犠牲が多くなってしまう。消費してしまう、時間に追われてつい「カリカリ」してしまう、などマイナスイメージがきまってしまう。このような「働く」ことへのイメージは、ヨーロッパ近代の生み出した機械化、経済競争の仕組みが世界に広まっていった結果、起きたことであることはよく知られている。現在では「働く」と

いうことに対して、「休暇」とか「余暇」ということが対置されるが、これはヨーロッパ近代の世界が独特な「働く」体制を生み出した結果、「休暇」や「余暇」が生み出されたということがよく言われている。かつては「働く」ということと「余暇」との間にはつきりとした差がなかったという訳である。

このようなことを頭でわかってても、実際にはなかなか理解できない。しかし現在の世界においても、「働く」と「余暇」とがかなり未分化な状態にある世界は存在している。例えばタイトルにあげた遊牧民の世界はその一つの例ではないだろうか。ということと前置きが長くなってしまうが、遊牧民の世界で「働く」ということの意味を考えたい。

この材料となる本はいろいろあるだろう。その中で、今回私が読み、ここに紹介するのは、松原正毅「遊牧民の世界」(中公文庫)と小長谷有紀「モンゴル草原の生活世界」(朝目選書)の二つである。前者はトルコの遊牧民ユルツクの人々を、後者はモンゴルの人々の生活を扱った本

である。従って厳密に言えば、両者の間に差異があることはいうまでもない。しかし著者がいずれも「日本人の遊牧生活への誤解がはなはだしい」状況に対して、事実の集積によってこれを正そうという姿勢は共通していることから、まとめて扱うことにも問題はないと思う。そこでさっそく紹介に移りたい。

まずはじめに「遊牧民」という言葉の問題である。この言葉がいつどのようなように使われはじめたのか、小生は浅学にして知らないが、この言葉には大きな問題がある。すなわち「遊」という文字がどうも遊ぶというイメージを醸し出してしまう。また「遊牧民」はあてもない放浪である」というイメージもなぜか根強い。しかしこれらの本を読むとこのようなイメージは全く誤解であることがはつきりする。そもそも遊牧というものは、去勢と搾乳という技術に支えられていること、また絶え間ない家畜集団の管理が要求されていることがわかるからである。例えばオスの家畜の去勢をしなかつた場合、群は分裂してしまうのだそうである。し

かしそれでは少数で管理しようとしている人間にとつては都合が悪い。また多数のオスが生殖可能であることは、子どもが生まれる時期を管理するためにも都合である。搾乳は家畜を殺さずに食料を得る有効な方法である。さらに馬に乗るなど（最初に人間を背に乗せた馬はどんなに抵抗したろう！なんと言っても背に乗せたら何をされるかわからないのであるから）の技術があり、家畜集団の管理が可能になったのである。さらに遊牧生活を人々の移動は決して、放浪ではない。長い目で見れば一定の場所を回っていることになる。しかも彼らは必ずしも草がなくなつたから移動するわけではないのだという。むしろ動物の習性である、移動自体が目的であることにあわせて人間が移動しているのである。こうしてみると、人間が動物の習性にあわせながら、しかし独自の技術によつてこれを管理している姿がよくわかんと思う。さてではタイトルに戻つて、遊牧の世界で「働く」とは何かを考えてみたい。確かに遊牧の世界でも「余暇」はある。祭りなどがその例だが、しかしそこで行われるものは馬乗り競争など、生活に必要な競い合いであることが多い、また狭いゲル（移動式になつていく彼らの住居）で息苦しくならないのか、自分のプライバシーはどう確保されるのかと思いきや、

ゲルを離れて家畜の見張りをしている時間が、まさに自由で孤独な時間である、との記述にあつたと、なるほどと思いつつ、やはり私たちの「働く」というイメージとはずいぶんかけ離れているような気がする。このような「働く」とことと「余暇」とが未分化に近い状態が、いいのかわいのかはよくわからない。しかしこのような世界を知ること、今の私たちの、もしくは私の「働く」ことを相対化し、改善していくことのひとつの手段にはなり得ると思う。

新しい階層社会への危惧

理科 武神 一雄

最近、マスコミ・週刊誌等でよく言われているように、「働く」ことの考え方に大きな変化がみられる。要するに、一つの会社で終身働く「終身雇用制」がくずされ、特に若い人達は転職することがあたり前になりつつある点である。また、三十才位までは就職せず、フリーターなる「職業」も生まれてきた。

大きな社会問題になりつつある「リストラ」による失業、転職することがままならず、ストレスにより自殺するケースも目立つようになってきた。

社会的に必要な人材は転職もでき、収入も増えるであろうが、その反対の人もまた数多く出よう。十年位前まで言われていた「一億総中流」という日本の意識はくずされ、新しい階層社会が生まれていきそうである。下層の人は努力してもなかなかむくわれない社会が来そうである。所得格差もどんどん広がっていくであろう。

このような環境下で「学び」「就職」することに對する考え方も変わらざるをえず、よい学校へ入り、よい就職をし、生活が安定する、という図式はだんだんに成り立たなくなっていく。

こういう中で「働く」ことの意味を考へることが大切だと思う。これからは、何としても上層階級になるため、よい学校に行くのはもちろん、個人的にも多くの努力をして実力をつける。

：いわゆる勝ち組
そんな競争社会を嫌い、たとえ収入が少なくても精神的豊かさを求め、仕事を考える。
：精神重視型

何も考えず、あまり努力もせず、現状に甘んじる人たち。ただし、不満はつのも、へたをすると犯罪の温床

になる。

…いわゆる負け組などに分化していくであろう。アメリカ社会のように。(ただしアメリカは日本と異なり、転職しやすいシステムとなっている。)君達はどう考えるだろう。書籍のみでなく、新聞、TV、週刊誌など幅広い関心をもってもらいたい。

東歌その他

国語科 忠鉢 仁

現在はこれまでの日本では考えられないほどの就職難の時代といわれ、失業率がかつてない5%の大打に乗ったとか、リストラ・倒産で中高年の自殺が異常に増加したとか、はたまた若者のブラブラ病(「フリーター」)がとか、この二、三年マスコミの格好の標的になっていることは諸君も既に十分承知していることだろう。そして、ものの考え方・価値観・社会の多様化にもなっており、「自分がどんな仕事にむいているのか」、「どんな仕事に魅力があるのか」、或いは又「どうしてフリーターではいけないのか」、「なぜ決まった職業に就かなければいけない

のか」といった悩みを持つ諸君が多くなっているのも事実である。諸君の悩みに対して私が答えることの出来るのは「働かざる者は食うべからず」ということくらいであって、「他人に迷惑をかけない限り何でも経験し給え」というのが本音かな。それというのも、私が諸君達の年頃を過ごした時代とは違って、現代社会にはさまざまな便利なモノが溢れ、精神的にも物質的にも飢餓感がまるで感じられない、きわめて豊かなモノ社会・ゼニ社会だからである。

そんな思いを抱く私が、この「働く」ということに関して諸君に働きかけをするとなると、「日本にはこんなモノが残されているんだよ」というのがせいぜいか。

日本古来の歌集として知られている『万葉集』に、「東歌」と名付けられた歌が収録されている(巻十四)。東海道・東山道を基準にした東国といわれる地方を舞台にしたものだが、辛い仕事や誇らしい仕事を詠み込みながら精一杯生き心身を吐露している、生活の実際に即したものが結構多い。

三三五〇(…歌番号、以下同じ)筑波

嶺の新桑繭の衣はあれど君が御衣しあやに着欲しも

三三七三

多摩川にさらす手作りさらさらになにそこの児のこ

だかなしき

三四五九 稲搗げばかり我が手を今夜もか殿の若子が取りて嘆かむ

などは古来ずうつと愛唱されてきたものだ。

時代は変わって。鎌倉末期頃から現われたとされているものに、職人尽絵と呼ばれるものがある。平安時代に流行した歌合から生まれたもの(『東北院職人歌合絵巻』、『鶴岡放生会職人歌合絵巻』など)と、独立した風俗画(『職人尽絵屏風』、『和国諸職人絵尽』など)の二種類あるが、表情豊かに描かれた絵を見てみると「へえー、こんな仕事があつてこんな職人がいたんだ」という感懐が湧いてきて、飽きることがない。

いつの時代にも富めるもの、そうでないものは存在したわけだが、近代になってからの一現象として女性の悲惨な姿を伝えて印象深い細井和喜藏『女工哀史』、或いは苦界に生きる女性が登場する永井荷風『墨東綺譚』などは、現代の女性・現代社会におけるジェンダーを考える上で一読の価値があると思う。

昨年末アンテナが倒れたのを機にケーブルTVを受信し、時にお気に入りの俳優の出る映画を観るのが私の楽しみの一つでもあるが、一電車の中吊りを見るまでもなく、TVを中心とするマスメディ

アが垂れ流しにするくだらない（敢えて言いたい）情報が多すぎる現在である。そんな中で便利な情報収集の場となるのが（時には「何なんだ！」という講座もあるが）放送大学というチャンネルなのだが、その中から生まれた書籍の一つに小沢昭一『ものがたり芸能と社会』がある。どちらかというと世間から侮蔑の眼で見られる仕事に対する愛情がひしひしと伝わってくるものだ。失われたものに対する愛着ではなくて現在を見据えている視点に頭の下がる思いになる。

「英語」を活かした仕事

英語科 鈴木 清一

「英語力」を活かした仕事にどんなものがあるでしょうか。「翻訳家」「通訳」などがすぐに頭に浮かびます。ここでこれらの仕事に関する本をいくつか紹介したいと思います。

『翻訳の論理』（松村達雄著、玉川選書）は翻訳がただ「外国語を日本語に訳す」という単純な作業だけでなく、もっと複雑かつ繊細な作業であることを教えてください。

何も一々日本語に訳して英語を学ぶ必要はないのである。英語は英語として正しく完全に理解するように努力する。翻訳する場合は、自己が正しく理解した英文の意味、気分、ニュアンスができるだけ正確に伝達できるように努力する。単語の訳をつなぎ合わせて文章を訳してはいけない。センテンス全体の気持ちをとらえて、それをできるだけだけ忠実に日本語に再現する。これが翻訳というものである。翻訳とは、英語の語学力と日本語の表現能力と、この二種のやや性質を異にする能力をたくみに結合する作業をいうのである。一つの文を訳す以前に一つの単語についても様々な問題が存在します。一つの単語にもその背景となる文化・社会が存在し、背景が変わればその言葉の意味もまた変わります。一つの英単語に一つの日本語が必ずしも一対一で対応するわけではありません。その単語が使われる場面や状況によって、またその単語がもっているその社会や文化におけるイメージによって、一つの言葉がいくつもの意味を帯び、広がりを生み出すのです。このようなことを理解せずに、翻訳などできるわけありません。「翻訳」するには「語学力」だけではなく、お互いの文化や生活を理解する「心」が「知識」以上に必要だということはこの本は私たちが

に伝えてくれます。

皆さんは「社会」・「個人」・「恋愛」・「存在」という言葉がもともど使われていた言葉ではなく、翻訳を通して使われるようになった言葉、あるいは新しく作られた言葉であることを知っていましたか。これらは「翻訳語」とか「新造語」とか呼ばれるものですが、どのようにしてこれらの言葉が生み出され、あるいは使われるように至ったかを詳しく解説してくれている本が『翻訳語成立事情』（柳父章著、岩波新書）です。明治初期の翻訳事情を社会的な背景と絡ませながら、非常に興味深く記しています。「当てはまる言葉がないから新しい言葉をつくった」という単純なことではなく、このような言葉が生み出される過程には翻訳家の苦渋と努力があったことが痛感されます。

『翻訳家になるには』（中島さなえ著、ペリかん社）はこの「翻訳」という仕事を具体的に解説してくれています。実際に翻訳家として活躍している人たち取材している中で、翻訳という仕事の大変さと面白さを様々な面からドキュメントタッチで浮き彫りにしています。実際に翻訳を仕事とするのに必要な勉強や努力について経験者の目から直接語られているので、非常に説得力があります。

『英語通訳の勘どころ』（小林薫著、

丸善ライブラリー）は実際に通訳を行つてきた著者がその体験をもとにまとめた通訳論です。具体例や訳例から細かい発音に至るまでわかりやすく、また面白く記されています。『通訳・通訳ガイドになるには』（编者、ペリカン社）も実際に通訳をしている人の体験談をインタビュー形式でまとめたものです。試験や学校についても詳しく解説しています。

漱石から

図書館 鳥居 明久

多くの学生が大学を出る。最高等の教育の府を出る。（略）その秀才が夢中に奔走して、汗をダラダラ垂らしながら捜しているにもかかわらず、いわゆる職業というものが余りないようです。余りどころかなかなかない。今言ふとおり天下に職業の種類が何百種何千種あるかわからないくらい分布配列されているにもかかわらず、どこへでも融通が利くべきはずの秀才が懸命に駆け回っているにもかかわらず、自分の生命を託すべき職業がなかなかない。

今から九十年近く前の、漱石の『道楽と職業』という講演の一節である。昔も今も似たようなものなかもしれない。この講演で、漱石は、文明の進展にともなつて職業が専門分化するとともに、人間は自分一人ではとても生きられないようになったことを指摘し、「専門的になるといふのは外の意味でも何でもない、すなわち自分の力に余りあるところ、すなわち人より自分が一段抽んでている点に向かつて人よりも仕事を一培して、その一培の報酬に自分に不足したところを人から自分に仕向けてもらつて相互の平均を保ちつつ生活を持続するということに帰着する」と言っている。そして、「職業というものは要するに人の為にするものだということに、どうしても根本義をおかなければなりません。」と断ずる。「人の為」とは、「人を教育するとか導くとか精神的にまた道義的に働きかけ」ということではなく、「人の言うがままにとか、欲するがままにといういわゆる卑俗の意味で、もつと手短に述べれば人のご機嫌を取ればというくらいのこと」なのだと言う。したがって、「己を曲げて人に従わなくては商売にならない。」のであつて、「物質的に人の為にする分量が多ければ多いほど物質的に己の為になり、精神的に己の為にすればするほど物質的には己の不為になる」という原理が

成立するということになる。「己を曲げ」ずに「自己本位」であることと、職業に就くことは矛盾するというわけだ。

この矛盾を避けて生きようとしていたのが、『それから』の主人公、長井代助であつた。代助は、大学時代からの友人であつた平岡から「何故働かない」と問いただされて、「何故働かない」と問ひや僕が悪いんじゃない。つまり世の中が悪いのだ。（略）悉く暗黒だ。その間に立つて僕一人が、何と言つたつて、何をしたつて、仕様がないうさ。」と答える。代助は、「暗黒」な世の中に立ち交じつて働くことによつて、自らも「暗黒」を帯びることを拒否するのである。

代助は、自己本来の活動を、自己本来の目的としていた。歩きたいから歩く。すると歩くのが目的になる。考えたいから考える。すると考えるのが目的になる。それ以外の目的を以て、歩いたり、考えたりするのは、歩行と思考の墮落になる如く、自己の活動以外に一種の目的を立てて、活動するのは活動の墮落になる。

ここには *being or nothing* の発想がある。そして、その発想で生きることが可能にしてきたのが親の経済力であつた。代助は、三十になつてまでも、実業家の親から金をもらつて生活しているのだ。「自己本来の活動」、「自己本来の目的」を言

う代助の生活そのものが、「暗黒」な「世の中」との交渉によって得られる金に支えられている以上、そこで求められてる^三にはかえって頹廢の臭いがする。それを働かないことにおける頹廢と言ってもよいだろう。

一方、「現実と悪闘しているものは、そんなことを考える余地はない。日本が貧弱だって、弱虫だって、働いているうちには、忘れていくからね。世の中が墮落したって、世の中の墮落に気が付かないで、その中に活動するんだからね。」と言う平岡は、代助とは逆の *all or nothing* の中にいる。平岡は、「世の中」に「自己本来」を求めようなどとはしない。^三を求めることの不可能が *nothing* への自棄となつていく。これは、働くことにおける頹廢である。

漱石は、先の講演の中で、「どうしても他人本位では成立たない職業」があると言ひ、「科学者哲学者もしくは芸術家のようなもの」を挙げ、「道楽的職業」と称していたが、その漱石自身が、朝日新聞入社にあたって、「新聞」が「下卑た商売」なら「大学」も同じで、「商売」であることに変わりはないと述懐していたことを思い出せば、「道楽的職業」と名付けられたものも一つの理念的な典型にすぎないだろう。現実には、「職業が職業として成立するためには、「人の為」と

いうことがなくてはならないだろう。

しかし、代助と平岡のような両極端に働くことの現実を見るべきではないだろう。「人の為」と「自己本来」のせめぎ合いの中で人は働くのだ。^三を求めて現実から逃げるのでもなく、現実に埋没して *nothing* への自棄となるのでもなく。そのせめぎ合いの中に「自己本来」を求めるしかないのだろう。とすれば、働くことと生きることはほとんど同義と言えよう。

ところで、代助は、三千代（平岡の妻）への愛という「自己本来の活動」、「自己本来の目的」によって「世の中」に出ていくことになる。「門野さん、僕はちよつと職業を探してくる」

そう言つて、家から飛び出したところで、作品は終わっている。まさに、「それから」である。

「働く」本

理科 山賀 進

(1) これが原発だ（樋口健二、岩波ジュニア新書、一九九一年）

先日、東海村の核燃料工場で臨界事故

（核分裂の連鎖反応が起きた）という信じられないこと、起きてはならないことが起きた。事故直後の工場側の説明に対して、記者から「実際に作業を行っていた人たちは正社員ですか。」という質問が飛んだ。この場合は正社員だったが、それほど、原子力関係には下請けの人たちが多いことは常識になつている。

その下請けの人たちは、自分たちの働く環境の危険性をあまりよく知らされず、あるいは「暗黙の了解」という形で、でももつとも危険な、そして原子力関係の仕事というイメージにはそぐわない近代的な仕事（雑巾でパイプの錆をぬぐい取る）か）をしている。それも、1日に15分も働けば、あるいはひどいときには5分にも満たない時間働けば、放射線被曝の一日の許容量（法律的に決められたこれ以上浴びてはならないという量、それも原子力関係に働く人は一般の人の10倍の量とされている）を越えてしまうという場所だ。

原子力のことを考えるとき、こうした現場で働く人たちの存在を忘れてはならないと思う。この本は、そういうところで働く人のルポである。

(2) 春は鉄までが匂った（小関智弘、晩聲社、一九七九年）

大森の町の工場で働く職人のエッセイ。

とくにまったくの手作業だった旋盤作業（筆者は熟練工）がNC制御（コンピュータ制御、といっても今日のコンピュータと違って、直接数字の羅列で命令を書き込まなくてはならなかった時代）になるときに、筆者はこれも自分のもののようにと必死に対応する。筆者のように「職人気質」に満足しないで、先端のものも取り入れようとする個々人の努力にも支えられて、町工場は生き残ったのだらう。でも、バブル崩壊後のこの厳しい中、こうした人たちはどうしているだらう。

社会思想社から現代教養文庫として再販（一九九三年）、なお小関氏にはこのような題材での一連の著作がある。最近では「ものづくりに生きる」（岩波ジュニア新書、一九九九年）、「町工場・スーパードライバーなものがくり」（ちくまブリマープックス、一九九八年）など。

（3）「大草原の小さな家」シリーズ（ロラ・インガス・ワイルダー、福音館や岩波書店など）

いま、NHK教育TVで再放送されているので、見ている人もいるかもしれない。アメリカの西部開拓時代の働き者の「父さん」、これが現在、一時の低迷から脱しつつあるアメリカの原型だらう（彼のような働き者たちに、追い出されてし

まったインディアンの問題は別にして）。働きづめだが、でも余裕を持っている。次の宮沢賢治につながるころがあると思う。五、六年前の夏休みに、福音館書店版と岩波書店版をすべて読み直して、感動したことがある。

飼っていたブタを解体するとき、舌なめずりをして待っている姉妹の場面など、ちよつと食文化が違うことも実感させられる。

（4）宮沢賢治

彼の場合は、本ばかりでなく、彼の生き様も含めたトータルな意味で、猛烈に働いた一生だと思いが、でもいわゆる働き蜂ではなく、詩・童話の創作、音楽活動など幅が広い。こんな人生は真似しようと思っても、とてもできなかったわけだが。

小関智弘の本

技術科 野本 勇

鉄を削る

おんなたちの町工場

太郎次郎社 小関 智弘
現代書館 小関 智弘

数年前に、小関さんの講演会を聞く機会がありまして、その中で強く印象に残ったことがいくつもありました。そもそも、本を書くような人だから、昔町工場に働いていた体験をもとに著作活動をしている人だと思っておりました。ところが、最初の挨拶で、「本日休暇を取って来ました。」の言葉に、まだ大田区下丸子というところの、町工場の旋盤工であることに驚きました。

最初に印象に残ったのは、豊田佐吉のつくった「豊田自動織機」という会社の話がされたことで（内容は忘れた）、そこで作った自動織機を海外に輸出するとき、「人偏付きの『自動』ではどうしても英語にならない」ということで、人偏を取ってしまったというエピソードで、かつては自動（機械が勝手に動いているイメージがあるが）という言葉も、本来は人が関与していたということ。

次に、ある大メーカーが、幅三五mm、厚さが五ノ一〇〇mmの薄く長いステンレス板から「コ」の形をした製品を作る過程で、形だけから見れば簡単に出来そうだが、巻いてある長い材料から「コ」を取り出した後の、不要になる材料の部分を巻き取るのが、材料が非常に薄いのでうまく行かずに、苦労していた。それを町工場の人は、どう解決したかというところ、

不要な部分の材料に上下に幅1mm、深さ5mmくらいの凹凸を入れて、捨てる部分を強くしつかりさせることで、一日に何万という製品を作り出すことができた。これは、コンピューターでは、製品の方をなんとか工夫するだけで、廃棄する都分まで考慮できないが、町工場の熟練工が自分の経験から材料全てについて見ることが出来るのが人間の能力ということ。

最後にチャップリンの「独裁者」という映画の演説の一節を紹介して頂いたもので、あのヒットラーに化けたチャップリンが、大観衆を前にして言う言葉で、「乗り物は早くなったが、人々は孤独になった。知識は増えたが、豊かな感情をなくした。機械より人だ。知識より心が大切だ。でなければ、人生は無駄」という演説ですが、まさにゲームにハマッている現代社会に当てはめてしまった。

少し前置が長くなつてしまいました。日本の町工場は、全ての行程について見なければ成り立たないので、熟練したいるいろいろな技術を持つことになる。その結果として、日本の先端技術を支えていると言つても言い過ぎではない。ふだん我々は、先端技術で作られている製品は、コンピューター化したもので作っていると思つてはいないか、何でもコンピューターに任せればよいと思つてはいないだ

らうか。そのコンピューターのもとになるデータは、熟練した人達である。この人達を生み育ててきたのが、町工場の人々ではないか、その雰囲気やら苦勞を身近に感じる本である。

「鉄を削る」のモチーフは「ほんとうのものづくり」というのは、実は残りの10%をどう作るかにある。そして、その職人を支え、んてきたのが、「町工場のおんなたち」である。よく3K、長時間労働などの悪条件の中で、多くの職人が生きがいを持って働いているのか。「職人」を支え、精一杯働き、夢中で子どもを育てた、妻・嫁・母である「おんなたち」との対談集とも言える。

内山節の本

数学科 秋山 眞兄

『自然と労働』

(農文協人間選書七九) 内山節
『往復言簡思想としての労働』

農文協人間選書二〇一)

内山節
竹内静子

内山節(たかし)は在野の哲学者である。今日の日本の哲学・思想分野では、彼の「仕事」が私の知的好奇心を最も刺激する。ここにあげた著作は今回のテーマである「仕事」に関連しているものであるが、「仕事」と「稼ぎ」の相違や労働に時間が持ち込まれたことの問題性などの本質的な事柄を考察しつつ、今日の日本社会はいつたい何なのかを明らかにしていく。こういうと非常に難解な著作だと思われるかもしれない。確かに中学生ではやや難しいとも思われるが、高校生にとっては平易な文章であるといつてもよいと思う。彼の著作はどれもお勧めであるが、表記のもの以外にテーマとの関連では『自然・労働。協同社会の理論』(農文協人間選書一三七)もあるが、仕事と密接に関係してくる『貨幣の思想史』(新潮選書)が面白い。その他では、生徒諸君の大きな課題に直結している『自由論』(岩波書店)を特にあげておきたい。

